6　ミャンマー

「腰巻き」を選んだビルマ人

髙橋昭雄

パソーとタメイン

ズボンに革靴を履いてブリーフケースを持ったビジネスマンが闊歩するバンコクから空路四五分、ヤンゴン（ラングーン）のミンガラドン空港に着く。空港の中ではズボンを穿いている男性もちらほら見かけるが、いったん空港を出ると市街地のホテルまで、よほどの幸運でもないかぎりズボンを着用している男を発見することはまずない。彼らが日常下半身に着けているのは、マレーシアやインドネシアではサロンと呼ばれ、彼の地の都市部では今や家の中でしか着用されなくなった筒状の腰巻きである。ビルマ（ミャンマー）ではこの男物の腰巻きはパソーと呼ばれ、女物のタメインと合わせて、ロウンジー（lounji）と総称される。ロウン（loun）は「完全に覆い隠した」、ジー［チー(hkyi)］は「繊維」、をそれぞれ意味する。ちなみに、ジョージ・オーウェルの有名な小説『ビルマの日々』の日本語版は、パソーを「ロウンジーの古い呼び名」と解説しているが*、これは誤りである。

早乙女たちの仕事着

小説に登場する娘は、エインジーを着ないでタメインを胸まで上げて巻いている。ただし、田植えをするときには、女たちは日焼けを気遣ってか、長袖のエインジーにタメインを端折って穿き、顔にはタナカーというビルマの白粉を厚く塗り、頭にはカマウッという帽子をかぶる。以上のような事例から、農村部の伝統的な日常着はロウンジー一枚のみで、エインジーは村外へ行くときの外出着あるいは仕事着として着用されていたと推測することができよう。

経済発展と日常着

パソーやタメインに靴は似合わない。素足にパナッと呼ばれる皮製の草履を履くのが普通で、雨期で道路がぬかるんでいるときには、ジャパン・パナッと呼ばれる、昔年の日本の渚で使用されていたビーチサンダルを履く。仏教徒たちはシュエダゴン・パゴダに上るときは、その麓からパナッを脱いで歩く。一般に、寺院地に足を踏み入れるときは必ずパナッを脱がねばならないのである。筆者は農村調査の折、どうしても寺院地を通らねばならないことが幾度かあったが、雨期に牛糞と泥の混ざったぬかるみを毒蛇に注意しな

がら裸足で歩くのは決して気持ちのいいものではなかった。タイでは寺院地の中というだけで靴を脱ぐようなことはせず、仏像の安置してある部屋の中だけで靴や草履を脱ぐようである。ビルマ人はこれを仏陀に対する信仰の深さの違いによるものであると解説するが、筆者はそうは思わない。寺院地の土の上ですぐに裸足になれ、またすぐに履き物を履けるのは、ロウンジーにパナッという裸足になりやすい格好をしているからであり、靴やズボンが普及すればこのような習慣はおそらくなくなるであろう。それとともに、パゴダで一日中祈っている人の数も大幅に減るであろう。経済が発展すればそんな暇などなくなるのだから。

ズボンはつい最近までは軍人か警察官あるいは税関吏のような一部の公務員くらいしか着用していなかったが、近ごろジーンズを穿いた青年を町中でちらほら見かけるようになった。軍政下の経済開放政策にのって登場してきた各種の経済情報誌には、エドウィンやリーバイスなどの価格リストがしばしば掲載されている。しかし、リーバイス一着が三十代の公務員の月給の二倍もするなど、ジーンズはまだまだ高嶺の花である。ただし、水祭りのような晴れの日になるとジーンズを穿いた若者が目立って多くなる。ジーンズが晴れ着として着られているのである。暑いビルマの気候の中でジーンズがどれだけ普及するものなのか定かではないが、少なくともビルマの青年たちにとって、パソーを脱いでズボンを穿く文化と経済的発展が二重写しになっていることは間違いないように思われる。

ズボンからロウンジー そしてズボンへ

ビルマ族は、もともとはヒマラヤの北方山麓に住んでいた騎馬民族であったといわれている。ビルマ語の「南(taun)」が「山」と、「北(myau')」が「川下(myi' au')」とそれぞれ同じ言葉であることがその有力な論拠となっている。現在のビルマにおいては、北に山があって川下は南だからである。ヒマラヤ北方にいたビルマ族は、漢民族の圧力に押し出されるように八世紀頃に南下を始め、エーヤーワディ(イラワジ)川、サルウィン川沿いに南に下って現在のビルマの地に入ってきた。北方騎馬民族であった彼らはここで農耕民族に転身した。北方騎馬民族は、馬にまたがるためにズボンを発明した民族としても知られている。とすると、ズボンを穿いて馬にまたがっていたビルマ族は、南下にともなってズボンを腰巻き(ロウンジー)に着替えたものと考えられる。そして今、経済開放、市場経済化の号令のもと、徐々にではあるがズボンを穿く者、穿きたい者が増加し始めている。彼らがパソーやタメインをズボンやスカートに穿き替えるとき、ビルマの経済制度や政治体制は大きく変化しているに違いない。

注＊ ジョージ・オーウェル著／宮本靖介・土井一宏訳『ビルマの日日』、音羽書房、一九八〇年、および同著同訳『ビルマの日々』、晶文社、一九八四年。また両書とも、独特の織り方と模様を持った綿製の「ヤカイン・ロウンジー(yahkain lounji)」、原書は“Arakanese longyis”を、「アラカ(アレカ?)樹繊維でつくったロンジー」と、珍妙な翻訳をしている。

(たかはし あきお／アジア経済研究所地域研究部)